

はしがき

英語を解釈し英語を使って表現する。これをスムーズに行うための手段を本書は呈示します。大学受験生から社会人まで、英語の全体像と英語に接する基本的な姿勢が身につくようにまとめました。

本来、英語の学習が「英文解釈」「リスニング」「英作文」「英文法」と分かれているわけではありません。英語を解釈することと英語で表現することとは表裏一体の行為です。

「英語が話せる」とは「英作文ができる」ということです。

「リスニング」は「英文解釈」の一部です。

これが本書執筆の基本的な姿勢です。引用した短い英文(Reading)に、「基本意味・語法」として比較的詳細な語句の解説をつけたのも、英文法と単語の学習は切り離せないという考え方に拠ります。

本書は、拙著『鬼塚の英語マニュアル』(1994年・代々木ライブラリー刊)に加筆、修正したものです。この本が出版当初から各方面の方々に評価していただいたことは、筆者としては望外の喜びでした。そのお一人が山内昭夫氏でした。この度、原型をできる限り残して出版する機会と旧著の精読に基づくアドバイスをいただき、このおかげで時を経て再生させることができます。

本書の利用法は、前から順に読み進んでも、また、気になる事項から始めてらってもかまいません。いずれにせよ、自分が納得できる独自の文法理論を作る手助けとなればうれしく思います。

今回の修正作業は、疑問点が網羅された「山内メモ」に導かれながらの一昔前の自分との対話でした。旧著の「はしがき」でも述べたのですが、旧著はその出版に先立つ10年ほどの間に若い頃の私が接した学生たちとのやりとりから生まれたアイディアの記録です。当時お世話になった方々だけでなく、あの頃の若者たちに思いを馳せる楽しい機会にも恵まれました。御礼申し上げます。また、これが可能になったのも、あの後も教室やインターネットを通じて筆者の英語の勉強の相手をしてくれた真摯な学生たちのおかげです。ありがとうございます。

2006年 早春

鬼塚 幹彦

なお、本書や英語に関する情報は、インターネットのサイト「あすなるオンライン」(<http://www.asunaro-online.com/>) で提供していきます。

本書の構成と基本姿勢

§ 本書の構成

序章 英語の基本はSV関係

「英語の理解はSV関係に始まりSV関係で終わる」——この確認から始めます。

第1章 名詞——単語はイメージで

「名詞は意味の世界の最小単位」です。「名詞」の文中での意味を決定する「前置詞(=名詞の前に置く詞)」「冠詞(=名詞の冠になる詞)」「形容詞(名詞を形容する詞)」を取り上げます。

なお、「前置詞」の後の「名詞」が省略されたものを「副詞」と考えます。

第2章 英語の時制——「遠い・近い」が理解の近道

英文の意味の決定権を握る「動詞・助動詞の時制」を、「遠い・近い」という枠組みで考えます。

第3章 “V + N”(動詞+名詞)——動詞の後に名詞あり!

英語の基本つながりである「動詞+名詞」(V + N)を、「動詞の後に名詞あり」という表題で扱います。

第4章 文頭のパターン (I)——文頭は英文の入口

英文は「左から右への一方通行の線」です。先の展開を予想しつつ流れに乗って意味を受け取ります。そのためには、英文の入り口である「文頭のパターン」の習得が必須です。そういった観点から「文頭のパターン」をまとめます。

第5章 文頭のパターン (II)——カンマで文は結べない

「SVとSVはカンマでは結べない」という絶対的な規則から生まれる事項を「文頭のパターン」と関係させて考えます。

第6章 関係詞 — 名詞を入れるただの空箱

「SVとSVはカンマでは結べない」のひとつのケースが「関係詞」です。関係代名詞に関する問題点は、「関係代名詞は名詞を入れる空箱である」という基本姿勢でほぼ解決できることを、個々のケースで検証します。

第7章 比較 — 流れの中の対称関係

切り口は、「比較表現のポイントは、型（パターン）と意味において、それぞれひとつ」ということです。比較に対する基本姿勢の習得に焦点をあてます。

§ 本章の基本姿勢

1. 改訂に際し、例文（**Reading**：まとまった長さの英文の引用）や当時の考え方はあえてそのままにしました。その理由は、英文法の理論は唯一絶対のものがあるのではなく、どのように考えればより効果的かというものだからです。その考え方のヒントとして、私には懐かしい考え方も残しました。

2. 本書では、従来の「基本4品詞（名詞・動詞・形容詞・副詞）」「5つの文型」というアプローチ法を前面に出していません。こういった分類の意義は、拙著『英文法は活きている』（プレイス刊）を参照してください。『英文法は活きている』は、旧版（『鬼塚の英語マニュアル』）の上梓後10年以上を経て、新たに書き下ろしたものです。なお、必要最小限の参照箇所は具体的に示しました。

3. 「本書の構成」にも関連し、第1章に「前置詞」を据えた理由を述べておきます。

前置詞の基本意味を押さえる。これが、英文の意味の流れを手っ取り早く初心者理解してもらう方法ではないか、という当時の私の考えに基づく配列です。その後の教師体験からもこの考えは基本的には変わっていません。

これはまた、「（前置詞の後の名詞が省略された）副詞が、実は英文の意味を決める重要な役割を果たす」ということにもつながります。

§ 本書で用いる用語と記号

- 「名詞 (noun)」はNと表記しています。たとえば、一般に“S + V + O”と表記される第3文型をあえて“S + V + N”のように示します。その理由は、英語に接したときの私たちは、たとえば、“I have a pen.”の“a pen”を「O (=目的語)」ではなく、「名詞 (=N)」と認識するのではないだろうか、という私の考え方によります。
- 文法用語 (=専門用語) をできるだけ用いない。これが本書の基本姿勢です。ただ、最低限の用語は説明の補助手段として導入しています。その約束も兼ね、次のことを確認しておきます。
英文を構成するのは次の10個の単位です。

単語	名詞	動詞	形容詞	副詞
句	名詞句	×	形容詞句	副詞句
節	名詞節	×	形容詞節	副詞節

上の表について少し補足します。

- 動詞句と動詞節はありません。4×3-2の10個です。
- 「句」とは、in Japan「日本において」のように前置詞 (in) と名詞 (Japan) によって作られる意味のかたまり。
- 「節」とはI know that you live in Japan.「あなたが日本に住んでいることを知っています」のthat you live in Japanのように、S (you) とV (live) が入った意味のかたまりです。「節 (せつ)」を「節 (ふし)」と読む、あるいは「節目」という言葉でもわかるように、「節」はその部分だけで閉じて独立した意味の世界を作ります。